

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025 年 4 月 14 日（月）		
氏名	内屋 純	指導教員名	林 浩之
掲載内容（	☒ 学会研究発表 ☐ 講演講師 ☐ その他 ）※いずれかにチェック		
学会等開催日：	2025 年 4 月 11 日～	2025 年 4 月 12 日	
学会等名称：	第 37 回日本ハンドセラピー学会学術集会		
学会等開催場所：	パシフィコ横浜ノース（神奈川県横浜市）		
研究・講演タイトル：	術後早期から漸次静的装具を適応した肘関節周囲骨折患者における術後 12 週以降の拘縮改善効果		
発表者名（全員記載）：	内屋純 ¹⁾²⁾ ，林浩之 ¹⁾³⁾ ，桝田臣弘 ²⁾ ，棚橋宏行 ⁴⁾ ，横井達夫 ⁴⁾ ¹⁾ 星城大学大学院健康支援学研究科 ²⁾ 岐阜県総合医療センター中央リハビリテーション部 ³⁾ 星城大学リハビリテーション学部 ⁴⁾ 岐阜県総合医療センター整形外科		
研究概要 （150 字程度）	術後早期から漸次静的装具療法を適用した肘関節周囲骨折患者における術後 12 週以降の肘関節角度を後方視的に調査し，漸次静的装具の拘縮改善としての可能性を探索した．その結果，術後 12 週以降は肘関節角度の改善の少なく，装具の使用終了時に機能的角度を獲得した割合も低かった．拘縮改善を目的とした漸次静的装具療法は術後 12 週以降の肘関節角度に変化をもたらさない可能性がある．		
感想その他 アピール欄 （100 字程度）	本発表を通じ，肘関節周囲骨折患者に対して術後早期から漸次静的装具を適応した場合，術後 12 週以降は肘関節角度に変化をもたらさない可能性が示唆された．今回は比較対象がなく，漸次静的装具の特性が否かは確認できていない．今後は大学院での研究である動的装具群や装具未使用群などの対照群を設け，検討することに繋げていく．		
写真添付欄 2 枚以内			

星城大学大学院健康支援学研究科 研究成果報告書（学会発表・講演講師版）

報告日	2025 年 2 月 3 日		
氏名	村上ま比呂	指導教員名	越智 亮
掲載内容（ ☒ 学会研究発表 ☐ 講演講師 ☐ その他）			
学会等開催日：	2025 年 2 月 1 日	～	2025 年 2 月 2 日
学会等名称：	日本物理療法合同学会大会 2025		
学会等開催場所：	愛知県 名古屋市		
国名，都市名，会場名	名古屋市立大学 田辺通りキャンパス		
研究・講演タイトル：	下腿三頭筋廃用性筋萎縮筋に対する局所振動刺激を併用した立位保持運動の効果 ～準ランダム化比較試験～		
発表者名（全員記載）：	村上 ま比呂，越智 亮，林 尊弘，篠崎 裕也，服部 菜恵		
研究概要 (150 字程度)	地域包括ケア病棟に入院中の高齢廃用患者を対象に，下腿三頭筋に局所振動刺激（以下；LV）を適用しながら立位保持訓練を行う 4 週間の介入研究を行った．立位保持のみの群と比べ，LV を適用した群のみ，4 週間後に 8 カ所の腓腹筋筋厚合計値の増大を認めた．筋厚の増加率と足関節底屈筋力の増加率に有意な正の相関関係を認めたため，LV 群の筋厚増大は筋肥大である可能性が高いと考えられた．一方，歩行や日常生活動作能力は LV 適用群と非適用群ともに改善したが，両群間で改善効果に差はなかった．		
感想その他 アピール欄 (100 字程度)	本学会において，同じように振動刺激を用いた物理療法や運動療法の介入研究の報告がみられ，同じ局所振動を用いていても，目的や使用方法などが異なっていた．自身の研究と似ている部分も多くあり，理解しやすく，すぐに臨床で活かせる内容であった．自身の研究においても，研究対象や使用方法を検討することで，より振動刺激を用いた理学療法の発展につながると考えられた．		
写真添付欄 2 枚以内	 		